

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

通元老師を偲んで(二)

大本山永平寺副監院
栃木県明林寺住職

西 田 正 法

さて、これからが通夜説教の本番です。つまり、ご参集の皆さまと共に御老師のお徳を思い起こし、そのお徳を私達が共有し、お徳の実践を通して我が徳に育ててゆく契機にしてゆく事が、本日のお逮夜であり、明日の御本葬の本来だからです。

檀崎通元老師のお徳として、私にとつて最も印象深い経験をお話したいと思います。行者になつてひと月余り経つた、昭和六十年五月五日の子どもの日、当時の御自坊溪壽寺に帰つておられた老師が屋根から落ちて入院された時の事です。

このお話は彼方此方で随分沢山して居りますので、皆さんの中にも「あー、あの話か」と、既に気が付かれた方もお有りでしょう。既にご存知の方へのお

願いとなりますが、どうかお隣の方等に、話に先駆けて内容をお伝えにならないようお願いします。(笑)

さて、運命の五月五日の事です。老師は本堂の棟に生えていたペンペン草が気になったそうです。ペンペン草の根が棟瓦を持ち上げて、その草が枯れると瓦と下地の間に隙間が出来、梅雨に入ると雨漏りの原因となりそうだとお考えになったそうです。庫裏の二階の窓から裸足で屋根に出て、屋根伝いに本堂の棟まで登り、ペンペン草を引き抜き、瓦を元の状態に直し、やれやれと本堂の天辺からの景色を見ると中々絶景で、暫しその景色に見とれておられたとの事。すると、天気が怪しまれていた空からポツリポツリと雨粒

が落ちて来たそうです。そこで老師は思い出されます。庫裏の瓦を釉薬瓦に葺き替えた際、瓦職人さんから「和尚さん、釉薬瓦は僅かな水分でも滑りますから、午前十時前、夕方は四時過ぎは絶対屋根には上がらないで下さいよ」との忠告です。「こりゃいかん、早う戻らにゃ」と、用心しながら本堂の屋根から庫裏の屋根へと移動されたそうです。そして、最初に屋根に出た窓の所まで戻り、窓の敷居に手を掛けようとしたその時、足下がツルツと滑り、敲き土の犬走りにパツサリと落ちられたのです。永年御修行の中に身を置かれた御老師ですから、五体投地の礼拝をされた形で落ちられたのです。ですから、額が割れ左臂と右膝を骨折されました。この日、こどもの日ということもあつて、親戚が訪ねておられて、「バサッ!!」という大きな物音に、急いで様子を見に行くと、老師が額から血を流し礼拝の姿で気を失つておられたのです。急ぎ救急車が呼ばれ、老師は大洲中央病院へと搬送され緊急入院されました。

入院の報が瑞應寺に届くと、行者である私に、早急に荷物を

整えて看病に向かうように、との命が下りました。取り急ぎ洗面道具や着替えを風呂敷に包み、利道副典さんの車に乗り込み病院に向いました。道中、利道さんが色々とお話をして下さるのですが、私は上の空でした。何と言つたつて、あの厳しい老師と二十四時間一緒に居なければならぬ生活が待っているのですから不安で仕方なかった事と、目下の問題は、病院に着いたら老師にどのような挨拶をしたら叱られないか、ということ

です。一日に三十回四十回と叱られていると、ものの考え方がぐどうしたら叱られないか」となってしまうのです。ですから、利道さんとの道中、私の頭の中は、病院に到着したらどう挨拶をしたら叱られないか、この事で一杯でした。

病院に到着し、老師の病室の前で道中の威儀を直し、身形を調えドアをノックし、「失礼致します」とお部屋の皆さんに挨拶をして、一番奥窓際のベッドに横になつて居られた老師のベッドの脇まで進み、手荷物を丁寧に床に置き、合掌し、そして道中練りに練つた挨拶を申し上げました。「この度はご災難で御座

いました。至りませんが身の回りの世話を勤めさせて頂きますので、ご指導宜しくお願い致します」と。

この挨拶は、普段のお叱りやお諭しを総合して考えたものなのです。お叱りになる時、老師は「えーか、雲水というものは叱られる事を嫌つたらいかん。娑婆に出て、やれ住職だ、副住職だとなつたら誰も叱つてはくれん。後ろ指を指して馬鹿にしても、正面からは叱つてはくれん。だから叱られることを嫌つたらいかん」そうおっしゃつた後に、「雲水は常に謙虚でなければいかん」こうお諭し下さつていたのでした。

また或る時は、「修行に大切なことは人に対する思いやりじや、修行に慈悲心が欠けたら野狐禪になる。」とも。また、余計な修飾語をつけて報告などを申し上げると「雲水が語ることは簡潔でなければいかん。余計な修飾はつけるな」と、叱られ「お前は余計な修飾をつけよ。いらん修飾をつけろな!簡潔に言え!」こんなふうにご指導を受けていたのですから、それらを総合的に加味して先程の挨拶を練り上げたのです。「この度は

「ご災難でございました」は、思
いやり。「至りませんが身の回り
の世話を勤めさせていただきま
す。」は、謙虚さ。「ご指導よろし
くお願い致します」は、簡潔さ
です。どうですか？完璧でしょ
う？叱られるような点は有りま
せんよね。

ここで老師が「いやいや儂が
粗相をしたばかりに、お前にも
迷惑をかけることになったが、
一つよろしく頼む。」となれば世
間の挨拶が成立する訳です…。
しかし、ここからが通元老師で
す。そんな…何と言いましょ
うか…素直ではないと言いますか、
あつ、そうです、禅機に満ちて
おられるんです。合掌低頭して
御返事を待つておりましたが、
お言葉が返って来ないんです。
私は合掌低頭の儘動きようがあ
りません。そこで様子を盗み見
ると、私が床に置いた風呂敷包
みをジロジロと観察され、更に
はその視線が下駄履きの私の爪
先に移り、そのままズーッと観
察されながら頭の天辺へ。そし
てまた威儀を点検するよう
ズーッと視線を下ろし、最後に
また手荷物に戻りました。

そこで初めて言葉を発せられ
たのです。「オイ、お前、坐蒲は

どうした？」坐蒲？急いで荷物
を調べ看病に行くよう命を受け
たので、坐蒲などさらさら念頭
にも浮かびませんでした。あつ、
坐蒲とは坐禅の時に使う丸い座
布団です。坐蒲をどうしたと言
われても…。仕方なしに、「いえ、
坐蒲は持つてきておりません」
と。すると、「なにを？お前、坐蒲
も持たずに何しに来たんじゃ。」
この一言に、ひと月前の私だっ
たら、「何しに来たつて？老師が
大怪我で入院し、看病に行けと
言われてきたんじゃないですか
!!」と、息巻いたかも知れませ
んが、ひと月間で完全に肝を抜
かれていきますから、為す術も無
く合掌したまま項垂れておりま
すと、「何をう至りませんけれど
も身の回りの世話を勤めさせて
頂きますのでご指導よろしくお
願います？心にもないことを
言うな。えらいことになった。
これから二十四時間一日中一緒
に居らにやならん。どう過ごし
たものか？そう思いながら嫌々
やつて来たんじゃないか？」(問
まあ、凶星と言いましょるか、
全くその通りでしたから返す言
葉もありません。普段、瑞應寺
で修行している時は、老師と一
緒に居る時間は長くて三、四

時間くらいでしょう？それで
も一日に三十〜四十回叱られて
いるのです。それが病室で
二十四時間一緒となつたら、ど
ういうことになるでしょう。「え
らいことになった」と私の心
中お分り頂けるでしょうか？
真つ暗闇に堕ちたような思いで
病院に辿り付いていたのです。
老師は、そんな私の心中を疾
うにお見通しだったのです。
三十になつて修行に来たけん
幾らかは遣る気が有ると思つて
見とれば、坐蒲も待たずにのこ
のこやつて来る。お前の心掛け
はその程度のもんよ。」何もそこ
まで言わなくても、皆さんもそ
う思われませんか？こう言われ
てですね、半分悔しいのと、事
実は事実ですから致し方ないの
と、複雑な思いで黙つておりま
すと、「まあ持つて来なかつたも
のは仕方がない。儂のお昼の面
倒が済んだら、溪壽寺に行つて
坐蒲を持つて来たらええ」と仰
り、私は「承知いたしました」と
返事を致しまして、何とか膠着
状態から解放されました。そし
て昼食を摂られるお世話が済み
ましたので、「他に御用がければ、
坐蒲を取りに行つて参りたいと
思いますが」と、申し上げます

と「ほうか、それじゃあもう、
中央バスに乗つて菅田で降りて
な、お前は何遍か行つとるけん
分かるな？片道百五十円じゃけ
ん往復三百円じゃ。そこに蝦蟇
口があるけん三百円取つて行つ
てこい」蝦蟇口から三百円出し
て着替えた作務衣のポケットに
入れて「行つて参ります」と申し
上げますと、「おい、お前は泥棒
か!」三百円かどうかは確
認しとらん「ちゃんと三百円を
見せて、では三百円頂きます、
と言つてから仕舞うもんじゃ!」
と。三百円くらいと思ひながら
も、少々投げやりに「はい、
三百円で御座います。では、頂
戴して行つて参ります」と、申
し上げ病室を出ようとしています
と、「おい。ちよつと待て。折角
三百円も使つて行くのに、ただ
坐蒲を取りに行くだけじゃ勿体
ない。そこでなあ、溪壽寺に着
いたら、庫裏の前の納屋に行け。
納屋の柱には縄が巻いてあつて
鎌が挿してある。柱の根元のバ
ケツには砥石が入っている。鎌
とバケツを持つたらなあ、庫
裏の土間を抜けて裏に行け。畑
の向こうに栗林が広がるとるけ
ん。右手の小川で鎌を研いだら、
栗林の下草刈りをしてきてくれ

んか。儂がする予定じゃつたが、
これでは草刈りもでけん。まあ、
広いけんのう暫くの間通つて貰
うことになるな」とのこととし
た。「何だ、坐蒲はお寺に行かせ
るための口実だったんだ」、そう
思いました。そして、此の事は
私にとつて目の前が開けたよう
な朗報でした。先程も申し上げ
ましたように、中学・高校の頃
には三反八畝の田圃を一人で耕
作していたのですから、草刈り
くらいは朝飯前と言つた感覚で
す。汗をかくだろうから風呂を
沸かして汗を流してから帰るよ
うにとの事でしたので、身心共
にさっぱりして病院への帰路に
着きました。大洲のバスターミ
ナルから病院までの道中で薬屋
さんが目に入りました。自分は
かりサッパリしたのでは申し訳
ないのでその薬屋さんに飛び込
んで、「済みません、寝たきり老
人用の体を拭くような洗浄剤の
ような物がありませんか？」と、
お店の人に尋ねました。この「寝
たきり老人用」と言うのが細や
かな抵抗でした。一方的に叱ら
れ続けて来たことへの抵抗と言
いますか、僅かに反撃出来たよ
うで、口にしながらいニンマ
リとしてしまいました。薬屋さ

んはそんなことは露知らず「あ
あ良いのがありますよ」と、商
品を出してくれました。病室に
戻ると老師に、「良い物が手に入
りましたので、お体を拭かせて
頂きます」と、身ぐるみ剥いで
お体を拭かせて頂きました。老
師も「ああ、これは有り難い、
良い気持ちになった」と、大い
に喜んで下さいました。

その時、時計を見ると丁度九
時でした。老師が入院されてい
たのは六人部屋で、他に四人の
方が入院されていて老師を入れ
て五人です。丁度、老師の隣の
ベッドが一つ空いていて、病院
の好意で私はそのベッドを使用
してよいことになっておりまし
た。つまり、老師のお隣で就寝
するのです。そこで、「老師、九
時の消灯時間となりました。他
に御用が無ければ私も休ませて
頂きます。」こう申し上げると、
「おう、お前も今日は疲れたろ
う、ご苦労さんじゃったの。も
う休んでええぞ」と、病院に着
いてから初めて優しい言葉を掛
けて頂き、喜びと充実感を噛み
しめながら、「ありがとうござ
います。お休みなさいませ。」
と申し上げ、老師のベッドとの
仕切りのカーテンをシャット

閉めたのです。すると、老師が
「おいおい、お前、今何をした？」
「はい、カーテンを閉めました。」
「確かにカーテンを閉めたの。
ほいじゃ、お前、看病の看とい
う字を宙に書いてみよ！」私が
宙に書きましたら、「見えん！
カーテンを開けて、もう一度大
きく書いてみよ！」と仰います。
仕方なしに、カーテンを開けて
「看」の字を宙に大きく手で書き
ました。「お前今どう書いた？
手と書いて、その後に見て書い
たじゃろうが!?」「わしは寝返り
を打ちたくても、片手は九十度
に曲げたまんま首からぶら下
がつておる。片足は足の付け根
から足首までギブスで固められ
て真つすぐなまま曲げることも
出来ん。寝返りを打とうにも寝
返りも打てん。そこでわしが寝
返りを打とうとするのを、お前
が目を見て、さつと手を出して、
はじめて看病じゃろうが!?カー
テンを開けて、お前、看病にな
るんか？」と叱られました。が、
私は心の中で「寝込んで仕舞え
ば見えないのに」と呟いていま
した。勿論、口には出しません。
「失礼いたしました。」と、カー
テンを開けたままベッドに潜り
込み、三十六計逃げるが勝ちな

らぬ、寝るが勝ちとばかりに狸
寝入りを決め込んだのです。す
ると、疲れていた性でしようか
本当に寝込んで仕舞いました。

役得というのは何処にでも有
るものです。修行道場の瑞應寺
では、四時振鈴と云つて起床時
間は午前四時です。ところが、
大洲中央病院の起床時間は、何
と六時なんです。「六時までは
寝ていて下さい。目が覚めても
ゴソゴソしたり起き上がつて他
の方の睡眠を邪魔しないで下さ
い。我慢の出来ない方は、中央
ロビーにお願いします。」との申
し伝えます。六時起床は、瑞應
寺で一年に一回、光幼稚園のお
泊まり保育の時だけです。それ
が、「六時まで寝ていて下さい」
と。しかも、それが暫く続くの
です。「朝寝が出来る」と、つい
嬉しくなつて仕舞いました。こ
れは本当に役得です。この幸せ
が、翌朝六時迄続くことを微塵
も疑うことなく眠りに就いたの
でした。ところが：

令和四年十月三十一日

大慈通元大和尚 通夜説教より

(以下次号に続く)

テレホン法話 〇八九七 四一・〇〇三三
禪のたより



◆ 一期一会

三月に入りますと、卒業と
いう言葉を多く見聞きするよ
うになります。卒業は友人や
慣れ親しんだ場所などとお別
れをするような少し悲しい気
持ちになってしまいかもしれ
ません。しかし、卒業とは新
しい出会い、新しい環境への
第一歩なのです。

出会いと別れ、その一つずつ
が独立している訳ではありません。
ん。別れがあり出会いがある。
出会いがあればもちろん別れが
あります。私たちは生きている
限り永遠に変わらないものと
巡り合う事は残念ながらあり
ません。永遠がないのであれば、
その時その瞬間を大切にしま
いと思うのが心の持ち方では
ないでしょうか？

ご存知の方も多いいと思います
が一期一会という言葉がありま
す。これは、江戸時代に活躍し
た井伊直弼の著書「茶湯一会集」
に次のように記しています。

「そもそも、茶湯の交会は、一期
一会といいて、たとえば幾度おな
じ主客交会するとも、今日の会に

ふたたびかえらざる事を思えば、
実に我一生一度の会なり。然るに
より、主人は万事に心を配り、聊
かも餘末なきよう深切実意を尽
し、客にもこの会にまた逢いがた
きことを弁え、亭主の趣向、何壺
つもおろかならぬを感心し、実意
を以て交わるべきなり、これを一
期一会という」

瑞応寺では、毎朝全員でお抹
茶をいただき、朝のご挨拶と道
元禪師のお示しを拝読します。
毎朝の事ですが、今朝のお抹茶
も一生に一度の出来事です。お
互いに相手を粗末に扱う事も、
何ひとつ疎かにすることもな
く、お互いに誠意をもつて一服
のお茶をふるまい、いただくこ
とが一期一会であり、道場での
全ての修行に通じる教えです。

檀崎通元老師は、その朝のご
挨拶で「何事も今日が最後と思
つて勤めなさい」とお示しでした。

私たちは、吐く息、吸う息か
ら始まって、全てに別れと出会
い、出会いと別れを繰り返しま
がら生きています。その中で「初
めて会う人だけでなく、いつも
会う人にも、毎日の行いにも今
日が最後と思い、その瞬間、瞬
間を大切にすること」すなわち、
毎日会う家族や、友人や、職場
の人たち、そして、初めて会う



春上山

■春上山

三月一日今年度最初の安居者二名が上山、基本的な進退を学び六日正式に入室、修行僧としての第一歩を踏み出す。五月の夏安居入制に向けて上山者は続く。



人たち、すべての人に対し、自分も含めて今日が最期という気持ちで、誠心誠意接するところが『一期一会』であり、それが私たちの「生きることを彩り豊かにして、別れが私の「生きることを深めていくのです。四月に入り新しい出会い



常楽会の様子

■常楽会

三月十五日(水)、三力年までの新亡精霊を供養する毎年恒例の行事、常楽会が行われた。新型コロナウイルスの感染予防を行いながら、村上山主導師のもと山内一同、積尊涅槃会法要を厳修。続いて読立供養。年明け続々と受付に來られた御遺族様方からは、冥福を祈る多くの気持ちをお預かりした。

が増えます。三月はその準備期間なのかもしれません。沢山の皆様の良き出会いと、そして新しいあなたへの出会いを心よりお祈り申し上げます。

瑞應寺専門僧堂 直録 楠本 剛大

令和五年三月一日〜十日

三月の日鑑	
一日	祝 祝
七日	参玄会(九日迄)
十五日	祝 祝
十八日	常楽会(おねはん)
廿一日	略布薩
廿二日	略布薩



萬靈塔(永代供養塔)

■萬靈塔供養

三月二十一日(火)、当山西墓地の永代供養塔「萬靈塔」の法要が村上山主導師のもと行われた。当日は雨天の為、瑞應寺法堂にて厳修。

■幼稚園卒園式
三月十七日(金)、認定こども園ひかり幼稚園の令和四年度卒園式が行われた。子どもたちは、ののさまに見守られながら、園を後にした。

四月の予定

一日	祝 祝
四日	参玄会(六日迄)
八日	積尊降誕会
十五日	祝 祝・略布薩
十八日	観音講・勉強会
廿八日	前夜祭
廿九日	春季金毘羅大祭
廿日	略布薩

銀杏感謝録

愛媛県	神野英雄 殿
広島県	長福寺 殿
青森県	霞ノリ 殿
香川県	矢野征郎 殿
山口県	安禅寺 殿
新潟県	広厳寺 殿
東京都	仁杉洋子 殿
茨城県	孝顕寺 殿
長野県	大輪寺 殿
京都府	鳥越万寿子 殿



鐘 声

三仏忌の一つである涅槃会のお勤めを無事に勤めることができた。まるで赤子がよちよち歩きをする程度の前進ではあるが、少しは自分の中にある仏法僧が動き出した実感が持てた。長い道程のほんの小さな一歩ではあるがこれからも精進していきたい。

鐘司 智之

静岡県	般若寺 殿
愛媛県	宝蔵寺 殿
東京都	五十嵐文夫 殿
愛媛県	北谷寺 殿
愛媛県	戸梶元齋 殿

(令和四年十二月二十六日受付迄)

令和五年四月二十九日(土) 旧三月十日

前夜(四月二十八日)十九時 上殿祈禱
当日 十一時・十四時 上殿祈禱

金毘羅大祭

福引・福餅進呈・琵琶演奏

佛國山 瑞應寺